

戦火で刻まれた年輪

—ユーハイムの受難と再生—

(株)日本設備工業新聞社
代表取締役社長 高倉克也

木の切り株模様が印象的なバウムクーヘンは洋菓子ブランドのユーハイムによって日本の名菓となった。創業者のカール・ユーハイム（1886-1945）は第1次世界大戦中に捕虜として日本に連行され、終戦後もそのままとどまって妻のエリーゼ（1892-1971）と共にユーハイムの礎を築いた。ドイツ、中国、日本に連なる遙かな道のりは困難を極め、たびかさなる戦争と震災で3度も店を失っている。過酷な歴史に翻弄されながらも決してあきらめることなく断崖の淵から甦ったユーハイムの源流をたどってみよう。

日本初のバウムクーヘン

カールはライン河に沿うドイツ南部の小さな村カウプ・アム・ラインで生まれた。ビール職人の10番目の息子だった。17歳で父を亡くし、職業学校に通いながら菓子店で修業を積んだ。

1908年、菓子店協会会長の斡旋でドイツの租借地である中国・青島の喫茶店に就職する。翌年には23歳の若さで独立し、念願の自分の店ユーハイムを開業した。カールの焼くバウムクーヘンは本場ドイツの味と好評で店も順調に発展した。

1914年の夏、一時帰郷して出会ったエリーゼと青島で結婚する。エリーゼは経理を習得した聡明な女性だった。



カールとエリーゼ

だが挙式直後に第1次世界大戦が勃発し、青島はドイツに宣戦布告した日本軍に占領される。非戦闘員でありながらカールは捕虜として大阪俘虜収容所に移送される。青島に残されたエリーゼは長男のカールフランツを身ごもっていた。

1917年、カールはインフルエンザの予防措置として瀬戸内海の似島検疫所に移される。1919年、捕虜たちのドイツ作品展覧会がのちの原爆ドームとなる広島県物産陳列館で開かれ、カールは菓子の製造・販売を手掛けた。このとき日本初のバウムクーヘンを出品し、バターを減らすなど日本風に工夫を凝らした味覚で評判を呼んだ。

敗戦が濃厚となったドイツは連合国と休戦協定を締結し、事実上の終戦を迎えていた。1920年、捕虜たちはついに解放される。青島に戻りたかっ

たカールは現地でコレラが流行していると聞いて日本に残留することを決意する。

菓子職人としてのカールの実力は明治屋の眼に止まった。東京・銀座に開設したカフェ・ユーロップに製菓部主任として採用され、エリーゼと息子を青島から呼び寄せた。一家は店の3階で暮らし、1階で働くカールと共にエリーゼも2階の喫茶・レストランに勤め、ようやく平穏な日々が訪れた。

横浜の震災・神戸の空襲

1922年、明治屋との契約期間が終わり、ロシア人が売り込んできた横浜・関内のレストランを買い取って新たにE・ユーハイムを開店する。Eはエリーゼの頭文字を取った。エリーゼは近所に手頃なランチの店がないことに着目し、コーヒー付きの安いドイツ風軽食を出すことを提案して店を繁盛させた。

翌年の夏には長女のヒルデガルドも生まれた。しかし9月1日、相模湾沖を震源とするマグニチュード7.9の関東大震災の襲来で横浜は壊滅状態となり、店も焼失してしまう。ポケットにある現金以外の全財産を失ったユーハイム一家は神戸の友人宅に身を寄せた。

なんとか再起を図ろうとしていたとき、横浜で知りあった世界的なロシア人舞踏家アンナ・パヴロワから三宮の洋館を紹介される。そこで救済基金から借りた資金を元手に新店舗ユーハイムズの開業にこぎつけた。

カールは常に一級の方法を仕入れ、国内で手に入らないときは海外から取り寄せた。日本の弟子たちには材料を正確に計る科学的方法を教え、売れ残った菓子は窯で焼いて捨てるほど最高の品質にこだわった。

ユーハイムズは近代的な工場を建設し、日本で初めてマロングラッセを販売するなど着実に業績を伸ばしていった。常連客には作家の谷崎潤一郎もいた。売上げが落ちるときがあってもエリーゼは「私たちは最高の材料と最高の技術でお菓子をつくっています。心配ありません」と従業員を励ました。

平和を創り出す人たちは

ふたたび第2次世界大戦の暗雲が漂い始めた1935年、高熱で倒れたヒルデガルドが幼くして他界するという不幸に襲われる。1937年、カールは精神に変調をきたし、入院した病院から脱走するなどの奇行を繰り返すようになる。日中戦争の発端となった盧溝橋事件のニュースを聞いて異常な言動が目立ち始めたという。エリーゼはカールをドイツに帰して治療に専念させた。数年後に帰国したものの、明るかった性格は一変し、以前のように働くこともできなくなっていた。

1941年に太平洋戦争が勃発し、弟子たちは次々と戦場に駆り出された。戦況の悪化に連れて物資が不足し、ユーハイムズは閉店を余儀なくされる。工場だけは稼働してドイツ海軍に支給するパンを焼いた。1945年6月の神戸大空襲で工場もついに損壊し、二人は六甲山のホテルに移り住む。ドイツ軍に徴兵されたカールフランツは同年5月にオーストリアのウィーンで戦死していた。

終戦前夜の8月14日、中風を患ったカールは安楽椅子に座ってエリーゼと話しながら静かに息をひきとった。58歳の短く険しく波瀾に充ちた生涯だった。最後に「私は死にます。けれど平和はすぐ来ます。神様か、菓子は…」とエリーゼに語ったという。

カールの死後、GHQ（連合国軍最高司令官総司令部）の指令でエリーゼとカールフランツの妻子はドイツに強制送還される。戦時中にドイツ婦人会で活動していたことやカールフランツの従軍が睨まれたのだ。

しかしユーハイムが消え去ることはなかった。1950年、戦場から戻ったカールの弟子たちによって神戸の生田神社前で再開する。エリーゼは1953年にドイツから戻り、死ぬまで日本にいと宣言して社長などを務め80歳で永眠した。

ユーハイム家の墓は兵庫の芦屋霊園に設けられた。山の中腹にある御影石の墓石にはカール、エリーゼ、カールフランツ、ヒルデガルドの名前と共に「平和を創り出す人たちは幸いである」という言葉が刻み込まれた。